

折り紙に風船バレー。デイサービスに、子ども扱いされるイメージを抱くシニアは少なくない。特に男性は抵抗を感じやすく、一般的に利用者の7割ほどは女性だ。この状況を変えようと、男性目線で運営する施設がある。

童謡、塗り絵、折り紙はちょっと…

扉を開けると、レディ・ガガのアップテンポなナンバー「Born This Way」が流れる中、シニアたちが体操に励んでいた。周りには全自動の麻雀卓やパチスロの台がずらりとならぶ。

全国に23店舗を展開するデイサービス、「ラスベガス」のカジノを楽しめることで男性からの人気が高く、チェーン全体で約1200人いる利用者のうち7割が男性だ。1号店として2013年にオープンした、東京の足立店を取材した。

ブラックジャックテーブルを囲む4人の男性は、真剣な面持ちでカードを見つめていた。白シャツに黒ベスト姿のディーラーが「お、ここで賭ける！勝ったらでかいですよ」と場を盛り上げる。男性

たちは「一気に入ったよ」とにんまりしたり、「はーだめだ」と頭を抱えたりと一喜一憂していた。

施設内では、オリジナル通貨「ベガス」が流通している。体操に参加すると1万ベガスがもらえ、それを元手にカジノを楽しめる。稼いだ額に応じて表彰されるので、みな勝負に熱が入る。

ラスベガスを運営する日本シニアライフ株式会社は、00年からデイサービス事業を始めた。当初は「従来型」のサービスを提供していたが、社長の森薫さんは現場で課題を感じていた。

「男性は自尊心が高い傾向があり、童謡を歌ったり塗り絵をしたりというプログラムは受け入れづらい。次第に足が遠のいて体が衰え、要介護度が

上がる人もいました」

そんな中、米国を訪れた際にラスベガスのカジノで見た光景に衝撃を受けた。客の大半が高齢者で、杖をついたり車いすに乗ったりしながら、生き生きと輝いていた。

「これだ！」と思った森社長はシンガポールやマカオなど各国のカジノを視察し、約2年後にラスベガスを立ち上げた。

施設の随所には、思わず通いたくなるような工夫がちりばめられている。送迎車は、金の文字で「Las Vegas」と書かれた黒塗りのワンボックスカー。「近所の人に恥ずかしいから介護施設っぽい白い車であるな」という利用者の声を反映したものだ。店に入ったときにワクワクするよう、赤のカーペットを敷いたり

シャンデリア風の照明を下げたりと内装にもこだわる。

利用者の一人で、自称「元・北千住のナンパ王」のOさん(76)は、初めて訪れたときの驚きを振り返る。「デイサービスなんてじいさんとはあきらかに違うところだと思ってたけど、ここは楽しいところだなんて」

森社長にとって印象深い老夫婦の姿がある。妻に連れられて見学に来た男性が「明日から行く」と口にした途端、妻が号泣したのだ。男性は体の自由が利かず精神的にも荒れていた。介護で疲労困憊した妻は夫にさまざまな施設を勧めたが、拒まれ続けていたという。

ラスベガスに通い始めて、要介護度が改善した人は少なくない。「歩けるようになったり、会話が増えて顔つきも変わったり。心が元気になれば体も元気になるケースは多い。『ここがなきゃ、家から一歩も出なくなっ

俺も楽しめる

デイサービス

て死んでた」と話すかたもいました(森社長)

時には、「ギャンブル依存症になるのでは?」「税金である介護保険料を遊びに使うのか」などと批判的な声も寄せられる。しかし森社長はきっぱりと口にした。

「これまでの利用者約5千人のうち、依存症になつた人はゼロ。際限なく遊べる環境ではないので依存できません。手段は遊びですが、活力や健康を取り戻すという結果を出している。それが一番大事だと思います」

東京都杉並区にある

「5がつく日はワインの日」

日本の介護業界に昔から根づく「お世話をしてあげる」というメンタリティーは、利用者の子ども扱いの原因の一つだと指摘される。ふれあいの家では、敬語で話したり、トイレは個室の外で見守つたりと、自尊心に配慮した対応がとられている。利用者のとっておきの楽しみが、「ワインの日」。

つくるう」と立ち上げた。一日の利用者は15人ほどで、おのおのが麻雀や囲碁、将棋などに興じる穏やかなサロンのような雰囲気だ。70〜80代のシニアボランティアも輪に加わるが、本人の達成感を奪わないよう、フォロワーは最小限にしている。

毎月5がつく日の昼食時、小さなコップ一杯のワインもしくはジュースが出る。カレンダーを見て、「俺が来る曜日はワインの日が少ない」と文句を言う人がいるほど、大人気のイベントだ。

「通い始めてからうつ病状が落ち着いた」と話すのは、小菅晴揚さん(77)。昨春秋に妻を亡くし、当初は心療内科にかかるほどふさぎこんでいた。「来たばかりのころは暗いって言われてたけど、今は明るくなったって。仲間と過ごしているからだね」

び、「家族に面倒をみてもらっている以上、移りたくないとは言いがらうのだろう」と感じるという。「生きてるっていいねって思ってもらうこと。それがみなさんの健康のためのこのやり方です」

一般社団法人日本デイサービス協会の森剛士理事長によると、豪華な食事や旅行、マッサージなど魅力的なサービスを打ち出して差別化を図る施設は増えているという。

「楽しんで通うきっかけづくりだけでなく、要介護度を下げるなど利用者の健康増進につなげることも重要。社会保障費が膨らむ中、デイサービスには「預かる」だけでなく「自立支援」の役目も求められています」

男性も、楽しく元氣な老後からこぼれ落ちることのないよう、介護の現場はあの手この手で工夫をこらしている。

「松深ふれあいの家」も、利用者の7割を男性が占めるデイサービスだ。オープンしたのは01年。定年後、居場所を求めていた男性5人が、「自分たちが行きたくなる理想の場所を

日本介護業界に昔から根づく「お世話をしてあげる」というメンタリティーは、利用者の子ども扱いの原因の一つだと指摘される。ふれあいの家では、敬語で話したり、トイレは個室の外で見守つたりと、自尊心に配慮した対応がとられている。利用者のとっておきの楽しみが、「ワインの日」。

毎月5がつく日の昼食時、小さなコップ一杯のワインもしくはジュースが出る。カレンダーを見て、「俺が来る曜日はワインの日が少ない」と文句を言う人がいるほど、大人気のイベントだ。

「通い始めてからうつ病状が落ち着いた」と話すのは、小菅晴揚さん(77)。昨春秋に妻を亡くし、当初は心療内科にかかるほどふさぎこんでいた。「来たばかりのころは暗いって言われてたけど、今は明るくなったって。仲間と過ごしているからだね」

だが本人は楽しんで通っている。家族の意向で別の施設に移る人もいない。デイサービスに対して、入浴介助や口腔ケア、専門的な運動訓練など、健康や身体機能向上のための本格的なサービスを求める声は一定数ある。

施設長の松本典子さんは、最終日に寂しそうな顔をみる利用者を見るた

本誌・大谷百合絵

